

Fate/Crossing Order

傘沙羅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始まりはいつも突然だ。

運命なんてものも必然の塊だ。

奇跡なんて人々の願いの果てだ。

だから、あの日から始まったこの旅路は、

決して間違った選択の先ではない。

そう、これこそ

『未来を取り戻す物語』

となるだろう。

「ところで私がマシユの胸部にフォウ君のように入ったらどう思う？」

「先輩、最低です」

目次

序章プロローグ	1
特異点F 一幕目	13
特異点F 二幕目	23
特異点F 三幕目	33
特異点F 四幕目	43
特異点F 五幕目	53
特異点F 六幕目	64
特異点F 七幕目	74
幕間の物語 序章↓↓↓第一章	83
第一特異点 一幕目	94

序章。プロローグ

目の前は地獄だった。

もはや人が生きているなんて、考えられない有り様だった。

空は黒く、厚い黒雲が天蓋の如く垂れ下がっている。

足元は瓦礫と灰、そして赤いナニカで埋め尽くされ歩く度に不快な音を鳴らす。

空気は肌を焦がすほどに熱く、腐臭を伴って鼻腔を通る。

「…………マ…………ユ…、マシユ！しっかりして！」

新しい居場所のできた大切な後輩。

最後に自身の目に映っていたのは助かる見込みのないはずの彼女だった。

そして彼女は今、私の腕の中で気を失っている。

マシユの額からは止めどなく赤いナニカが刻一刻とポタリ、ポタリと落ちていく。

何度目になるか分からない轟音とともに青色のナニカが転がり込んでくる。

「嬢ちゃん、しっかりしな！何も打つ手無しじゃあ、ジリ貧になんぞ！」

「そ、そうよ！貴方なんとかしなさいよ！このままじゃ、し、死んじやうじゃない！」

『死ぬ』

そんなことを言われても打つ手はない。

例え自分が人外のナニカを使役していたとしても、相手も同じ人外のナニカであるなら、同じ土俵の上にとっている以上、絶対的な勝利などない。

「アウェイクン解析始動ロードエラー――抽出不可――」

最後の手も今の状況では使うことができない。
その時こちらと対峙する人外のナニカと目があった。そして、

その口が、ニタリと三日月を描いた。

????????????????????
時は数時間前に遡る。

ケと口出しできませんね、Dr. ロマンさん」

私に支給された部屋は既にカルデアの職員の休憩室として使われていたが、その職員ことロマン・アーキマンさんは所長と比べればこの人の方が所長に向いてるんじゃないか、と思える程にフランクで話しやすかった。

「しかし、君の魔術についてだけどよくこんなことをして体がもつね。僕だったら半日もしないうちにあやふやになってしまおうよ」

「そう大したことじゃないですよ。」

慣れと研鑽と閃きと後、天からも見捨てられてるんじゃないかと思うほどの悪運があれば出来ますよ、大方は」

私は自分の右手の上に有るリンゴを軽く握る。

すると、リンゴは面白いように中心に向けてパツクリと割れていく。

そのまま握りしめるように拳を作ると指の隙間から細く切られたリンゴがポトツと皿の上に落ちた。

「自身の体に他の物体の性質を付与させる、なんて魔術はあまりメジャーじゃあないからね」

Dr. ロマンの言うとおり、私の魔術は他の個体の性質を自身に付与し、自身の力を強化する性質がある。

例えば今したように包丁などの刃物の持つ『切断』という性質と『硬度』という性質を腕に付与してリンゴを切ったり、岩盤のような高硬度の物体の性質を付与し銃弾を受け止めたりできる（後者は試したことはないが……）

「折角だし、ゆっくりしていきなよ。」

僕は医務室の方に戻るから、B班の出撃時間までにはコフィンのと

ころに集まってるね」

そう言ってDrロマンは私のマイルームから出ていった。

そうは言われてもゆっくりするのいいと言われても何をしようか。

この場には簡易的な生活用品と申し訳程度の私物、後は自分自身の体のみ。

……何をしようかと考えた結果、

「……日課の鍛練でもしてるか」

自分の体を使って暇潰しをすることにした。

????????????????????

???
side

「こっちの方に先輩の部屋があると聞いたのですが、詳しい部屋の番号まで聞くんでした……」

こんにちは、マシユ・キリエライトです。

先程から先輩……衣碇先輩の部屋を探しているのですが、見つかりません。

ドクターから自室にいるとだけしか聞いていないので、場所が分かればお会いできるのですが……

『……硝子玉一つ落とされた♪

追いかけてもう一つ落つこちた♪………』

「ん？先輩の声が……でも、歌ってる？」

先輩は初対面から素っ気ない性格だと思っていたのですが、そんな先輩がこんなに楽しそうに歌を歌ったりするのでしょいか。

少し歩くと僅かにドアの空いている部屋があり、その中から先輩の歌声が聞こえてきます。

そつと隙間から覗くと……………

「♪そうさ、必ずく僕らは出会おうだろう」

♪沈んだ理由に十字架を建てる時」

♪約束は果たされる」僕らはひとつになる」

…………あの先輩が部屋の中で赤いドレスのような衣装を纏って、クルクルと回りながら笑顔で歌っています。

もう一度言います、笑顔で歌っています。

それはもう心底楽しそうにまるで舞台の上で歌う歌手のように。

しかも衣装の装飾を次々と変化されていきながらしているので、ドクターから聞いた先輩の魔術とは別の何らかの魔術を使っているようです。

「やっぱり、歌を歌うと集中出来るね。

Dr. ロマンに言われた時間までもう少しあるし、もう一曲いってみようか！」

どうやら先輩はもう一曲歌を歌うらしいので、引き続き覗いてみましょう。

しかし、先輩つてあんな風に笑うんですね。

ずっと不機嫌そうな顔をしてレフ博士や所長の話を聞いていたのでもとても意外です。

「じゃあちよつとだけ恥ずかしいけど『TRUST HEART』いっ

ちよ、いってみますか！

♪鉛玉の大バーゲン♪バカにつけるナンチャラはねえく

♪ドンパチ感謝祭さあ踊……………れ……………」

「っ…その先輩これはあつと、えくと……………」

笑顔でクルツと先輩が回った時に偶然、先輩と目がバッチリ合ってしまった。先輩がギシツと言う音と共に石のように固まってしまいました。

そこから先輩は壊れかけの機械のようなぎこちない動きで此方に歩み寄って来て、少しだけ空いていたドアを完全に開けて、とても無機質な顔で……………」

「……………今のはすぐに忘れて。

後、他言したら命は保証出来ないから」

そう言つて自室のドアを完全に閉めてしまいました。

その間、私は無言で直立することしか出来ませんでした。

管制室の方に戻る際に先輩の部屋の方から叫び声が聞こえました
が……………聞かなかつたことにしましょう。

「……………それで医務室に来たんだね」

「恥ずかし過ぎて死にそうです」

マシユが去ってから私はすぐにD r ロマンのいる医務室へと転がり込んだ。

自分を先輩と呼ぶ後輩にあんな醜態を晒してしまったことが恥ずかし過ぎてもう立ち直れません。

こんな絶望感は初めて魔術の修行が友達にばれた時以来です。

「そろそろファーストミッションが始まるから、君もコフィンのある管制室に行った方が」

突然、医務室の照明が落ちた。

条件反射で腕先にサイリウムの性質を付与し、軽く指の骨を鳴らす。

すると手首から先が光を放ち簡易的な光源となった。

Dr. ロマンが感心したような声を出していたが、そんなことは気に止めず回りの状況を確認する。

『緊急事態発生。 緊急事態発生。』

中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。

中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。

職員は速やかに第2ゲートより退避してください。

繰り返します、緊急事………』

そんな私の内心を察したかのようにアナウンスが鳴り響く。

「管制室で火災?!ドクター、マシユや他のマスター達は怎么样了んですか?」

「今モニターを繋ぐからちよつと待ってて!」

モニター、管制室内を映してくれ!皆は無事なのか!」

医務室のモニターが切り替わった。

………真つ赤だった、ただただ赤かった。

床には多くの瓦礫が積み重なり、その隙間からは赤い炎が立ち上り、その下からは黒いナニカが川のように流れ出している。

幾つかのコフィンは砕け、マスター候補だったモノの欠片が割れた箇所から垂れ下がるかのように飛び出ている。

そして部屋の中央に鎮座するカルデアスは黒く濁ったように染まっている。

「っー」

その瞬間、私は医務室のドアを叩き開け中央管制室に向けて走り出した。

Dr. ロマンの言葉を振りきるようにして管制室の扉を目指した。幸い、中央管制室と医務室は歩いて2分ほどの距離だったのですぐに辿り着いた。

……………辿り着いたが、

「どうして!?! どうして開かないの!?!」

どうやら火災が原因で扉を開くシステムがダウンしてしまっている。

触ろうとしても中からの熱気によって扉が加熱され、下手に触れては火傷をしかねない。

「ハア、ハア、衣崎くん! ちょっと待ってくれよ」

「ドクター、扉が開かない! 他に開閉手段はないの!?!」

「何だって!?! 多分火災は何者かの破壊工作によるもので、爆弾の衝撃でシステムが故障したのか!」

今手動に切り替えるからちょっと待って!」

Dr. ロマンは胸元から端末を取りだし、扉の横のカバーを開けてコードを指した。

すると、僅かに数秒でドアがスライドし管制室内の状況が確認できた。

「僕は予備の電力施設に向かうから、君は急いで第2ゲートに退避し

「先輩……逃げてください、今なら……まだ……」
「諦めないで！ドクターの所にいけば絶対治るから、だから

『生きることを諦めるな』!!!」

しかし、その言葉を塗り潰すように背後の隔壁が轟音と共に降りる。

そしてもう一つの変化が起きた。



観測スタッフに警告。

カルデアスの状態が変化しました。

シバによる近未来観測データを書き換えます。

近未来百年までの地球において

人類の痕跡は 発見 できません。

人類の生存は 確認 できません。

人類の未来は 保証 できません。



黒く染まっていたはずのカルデアスが一転して赤く、紅く光を放ち出した。

特異点F 一幕目

……暗い、暗い、なにも見えない。

いや、見えないんじゃない、見たくないんだ。

自分が握っていたマシユの……後輩の手の温もりが感じられない。
い。

だから目を開きたくない。

『先輩、先輩……起きてください』

マシユの存在が感じられない、しかし体の周囲は熱くまだ火の手があることは感じられる。

『……先輩、早く起きてくれないと……』

いやだ、起きたくない。マシユの声がするが温もりが感じられない
か r

「……………殺しますよ?」

「突然に現れた生命の危機!!」

耳元でとんでもないことが眩かれ、意識が一瞬で微睡みから覚醒、むしろ興奮状態までハッキリと冴え渡った。

と言うかこの後輩、今とてつもなく恐ろしい単語が!

何か可笑しな声を骸骨が上げながら崩れていったが気にせずマシユの所に加勢する。

「マシユ！お疲れ、後2体位だから気に抜かないでね」

「せ、先輩！もう2体も倒してきたんですか!？」

「弓使いは懐にはいれば唯の案山子だから!」

「それは極論過ぎますよ先輩!」

????????????????????

「……以上が特異点における初陣の報告になります」

『うくん、こう言ってはなんだけど衣碕くん、君何者?』

「唯の下町の魔術使いですね、齢十代の」

『絶対嘘ですよね(だよね)!?、それ!』

という訳で、Dr. ロマン……もうドクターでいいか、ドクターとの通信が回復したから状況を説明してする。

でも弓や剣、棒使いの対処法は自己防衛の為に必ずですよね?

「いえ、先輩の常識と一般的な常識とは確実な誤差があるようです」

『下町の女の子って、そんなに過激だったっけ?』

さて、そんなことはどうでもいいとして。

「この、町なのかな?この火災のレベルはいったい何が起きたんだろう。

マシユが起きた時にはもうこの状況だったの?」

「はい、そうです。」

しかし資料にあるフユキとは思えません。資料によれば日本の平均的な地方都市であり、2004年にこんな災害が起きたと言う記述はありませんでした」

『おっと、そろそろ通信が切れそうだ。マシユの状態もある程度は把握できたから、詳しい話は送った座標にサークルを設置してからし
t』

「あ、切れちゃった」

モニターは消えてドクターとの通信が途絶した。

座標の指すのは現地地点から少し離れたところにあるらしい。

マシユはデミ・サーヴァントとなってるから足は速くなってるはずだから、走れば20分ぐらいで着くだろう。

「……それじゃあ先輩、目的地点まで移動しましょう」

「わかった、マシユの出せるスピードに合わせるから気にしなくていいよ」

「……………先輩、私、サーヴァントになってるので先輩を置いてくことになりますよっ!」

「因みに目的地点までどれくらいで行けるの?」

「全力疾走すれば3分程で着けます」

「……………サーヴァントの性能、嘗めてたよ」

????????????????????

「せい!」「はああ!!」

「ふう、お疲れ様です……スッキリしましたか？」

「……骸骨殴りすぎて手首痛めなかつたら満点だった」

流石に鉄の硬度を付与してもやっぱり消耗すれば怪我もしやすくなるから、もう少し硬いものが欲しくなってくるなあ。

まあ、そんなこんなで所長と合流出来たことで今のカルデアと他のマスター候補達への緊急措置やらがドクターと所長との間で交わされていた。

「……しかし、貴方マスターとしての自覚があるの？」

自身のサーヴァントと共に前線に立つなんて最早ただの自殺行為よ!？」

「いや、でもマシユがいくらサーヴァントでも疲労が溜まったら私達の生存に支障が出るので……」

「支障が出るもなにも貴方が倒れたらサーヴァントを維持できないんだから、貴方の命が最優先だって事を自覚しなさい!!」

交わされていたのだが、何時からか私に対する説教へとシフトしていた。

確かにドクターからの説明から私がこの実験の唯一のマスターになっちゃったから私の死⇨実験の失敗となってしまう。

だとしても、私だけを大事にしてもマシユが疲労しては勝てる戦闘でも勝つことができなくなってしまう。

……しかし、話してみると案外所長は悪い人間ではないようだ。

さっきの話やドクターとの会話の中のほとんどは相手の事を主体にして考えられている。

この所長は心が弱く、ビビリで、弱腰で、ひねくれものだけど芯は通っている……頼れる人らしい。

「……なによ、さっきから黙り込んで」

「……………」(ナデナデ)

「い、いきなり何するのよ！」

それともう一つ、意外とこの人かわいいかも。

よくしよくし、いい子いい子。

何だか身長的に少し小さいから撫でるのに丁度いいなあ。

「さてと、まずはサークルの設営でもしよっか」

特異点F 二幕目

????????????????????

……ガチャ。

それは全てのマスターに与えられた地獄であり、マスター達はその中の地獄と知ってなおあしを踏み入れる極点。

ある者は言った、『出るまで回す!』と。

ある者は言った、『回せ、回転数が全てだ……』と。

又、ある者は説いた、『課金は家賃まで!』と。

その者達の中で祝福された者達がいた。

しかしその何倍の量の者達が絶望の谷へと突き落とされた……

????????????????????

「という訳でサークルも設置しましたし、英霊召喚と参りましょうか！」

「先輩？何だか一瞬だけ夥しい量の呪詛が聞こえた気がしましたが……」

「この子の頭の中って、一体どうなってるのかしら……」

ドクターの指示にしたがってサークルを設置している折りに、ドク

ターから戦力の増強が必要と言われた。

確かに私がマスターである以上、前衛で戦闘し続けることはリスクが大きすぎる。

かといってマシユ一人で戦闘を続けていくのも難しい。

そこでマシユが防御に専念出来るように英霊をもう一人召喚することになった。

「触媒になるのがこの聖晶石でマシユの盾を召喚サークルに見立てて実行すればいいんですよね？」

「ええ、ただしどんな英霊が現れるかは全くの未知数よ？」

「どうせなら前衛の任せられる人が来てほしいな」

オルガ・マリー所長からもらった聖晶石と私が此処に来るまでに拾ってきた聖晶石を合わせると全部で九つ、三回の英霊召喚ができるらしい。

「それじゃあ、まずは一投目。参りましょうか！」

マシユの盾の上に出来たサークルに3つの聖晶石を放り込む。

すると聖晶石が砕け散り、サークルに3つの光輪が発生した後一本の光の柱が発生した。

光の柱が弱まっていくとマシユの盾の前に一人の女性が姿を現した。

桃色の髪に銀色のヒラヒラとした戦闘服(?)を身に纏っているその女性が静かに目を開けて言った。

「……マリア・カデンツァヴナ・イヴ、クラスはセイバー。

よろしく頼むわね、マスター」

「やった！早速前衛で活躍してくれそうな人が来てくれたよ、マシユ！」

「先輩、おめでとうございますー！」

セイバーのクラスで見たところ接近戦を得意にしてそうだからまず狙い通り!

「じゃあ続いて二投目え!!」

再び3つの聖晶石をサークルの中に放り込むとまたも3本の光輪が発生し、同じような現象がもう一度起きる。

「この光で骸骨達が寄ってこないのが不思議でしかたないなあ」

「先輩、次の方が来ます!」

続いて出てきたのは、少女だった。

もう一度言う……少女だった。

紅い目と黒い髪、そして風になびく黒マントととんがり帽子。

いかにも魔法使いチックな格好で現れた少女は高らかに宣言した。

「我が名はめぐみん!!紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者!

あまりの強さ故に世界に疎まれし我が禁断の力を、汝も欲するか?」

「……………ロリツ子!!!」

「な!だ、誰がロリツ子ですか!これでも私は一人前のレディなんですからね!」

「せ、先輩!めぐみんさんの声に反応したスケルトンが接近してきました!

戦闘準備を!」

「貴方、何でこんな非常事態でヘラヘラできるのよ!」

やって来てくれたのは嬉しいけど、余計な手間は抱えてこないでほしかったなあ。

あと一回分はまた今度に取りっておくことで、早速二人の力を見せて貰いましょうか！

「マシユ！マリアさん！めぐみん！戦闘を開始するよ！」

「了解。押し切ります、先輩！」

「分かったわ。さあ、始めるとしましょう！」

「え、いきなり戦闘ですか、では私は少し蚊帳の外で見学してますね。

私、キャスターですし」

約一名全然ノリ気じゃないのがいるけど気にしない！

増えた戦力を把握するには絶好の機会、そして今までの煩わしさからのおさらばを兼ねて……

『君達すぐその場から離れるんだ！』

「ちよ、ドクターいきなり何言って………」

『スケルトンの後方から接近してくる敵影を3つ捕捉した。』

観測計の反応から間違いなく、三騎ともサーヴァントだ！』

「ちよっとロマニー！どうにかしなさいよ！」

『僕にはどうもできないから慌てて警告してるんです！』

藍華君！頼んだよ！』

………今までの興奮が嘘だったかのように血の気が冷めていった。

確かにこの特異点に来てからの戦闘は動く骸骨が中心だったから、英霊の力を宿したマシユと魔術使いである私でも相手ができる。

しかし、相手がサーヴァントであるのならばおそらく此方の勝率は一気に下がるだろう。

ましてや三騎ともサーヴァントなら此方のサーヴァントが一对一で全員戦わなければならない。

その場合、めぐみんがキャスターであるため単騎ではまともな戦闘ができない。

マリアさん単騎で戦えるとして、マシユは所長を護ることもしなければならぬ。

「マシユ！すぐに盾を置いて召喚サークルを設置して！」

すぐに三回目の召喚をするー！」

「分かりました！サークル、展開します！」

「貴方、正気!?そんな投げやりの召喚じゃあまともなサーヴァントが出てくるかどうか」

「そんな事いつてる場合じゃ無いんですよ！」

残っていた3つの聖晶石をサークルに投げ入れ召喚を待つ……………が、

「光輪が少ない?」

二人を召喚したときには三本発生していた光輪が一本しか発生しなかった。

そしてさらに、光の柱が立つこと無く光が爆発し、硬い地面に一つの球体が音をたてて落ちた。

「……………え?」

絶望的な状況で希望を唐突に裏切られた人間はこんな気持ちなんだ、とまるで俯瞰者のような気分に一瞬なりかけたが慌ててその球体を解析する。

「……………フラガ・ラック?」

聞いたことのあるような響きだったが、それよりもその能力と耐久性、切れ味から私の中で一つの案が浮かび上がった。

それはあまりにも穴の空きすぎていて、魔術師が聞けば自殺行為だ

と罵るところか嘲笑を受けるほどの代物だった。

しかし、これより他の道はないのならばやるしかない。

「みんな、策があるから心して聞いて……………」

????????????????????

音をたてて燃える瓦礫の山を瞬く間に踏破しながら三騎のサーヴァント…………『ランサー』、『ライダー』、『アサシン』が獲物へと接近している。

「ランサー、少シハ静カニシロ。獲物ガ逃ゲテシマウ」

「ハハ、ハハハハハハハハ!!!」

「ハア、ライダーヲ見習ツタラドウダ」

「……………」

アサシンが高笑いし続けるランサーを諷めるがまるでとりつく島もない。

ライダーはまるで先行する獣のように無音で二人の前を少し距離を空けて駆けている。

ライダーはいざとなれば二人を置き去りにして行けたが、目標のサーヴァントの気配が一期に二体増えたことを残された数少ない理性が察知し一人では分が悪いと考えたため、二人の速度に合わせていた。

しかし、そのライダーの行動は裏目に出ってしまった。

二人から離れていれば……巻き添えを食らわなかつただろう。

『^{エクスプロージョン}我が人生の爆裂道!!!』

突如、空に真紅の魔方陣が発現し、後に炸裂。

ライダー達をまず襲ったのは目を直撃する閃光と破裂……いや爆裂音。

続いて、超高温の衝撃波が三騎に迫ってくる。

ライダーとアサシンはかろうじて回避できたがランサーはその衝撃波を食らってしまった。

「ヌウウウウウウ!!!!!!」

「ランサー!」

「はあああ!!!!!!」

「チィ!!」

瓦解仕掛けたビルの影からマリアが飛び出し、意表を突く形でアサシンを2騎から遠ざける。

マリアの短剣とアサシンの持つダークが鏝迫り合いをする中、ライダーとランサーに向けてアサシンが叫ぶ。

「何ヲシテイル!サツサト手伝エ!!!」

「よつと、ごめんなきいね、ちよつと通るよ!」

「!?!」

軽快な声と共に一人の少女がサーヴァントの戦場に飛び込んできた。

サーヴァント達とは違って迸る程の魔力を帯びていないただの魔

術師と平和な地域では思われるだろう。

しかし、今の冬木とその手に赤く光る痣——令呪があるのなら話は別だ。

(バ、バカナ！マスター・デアル魔術師ガ英霊ノ戦闘ニ介入シテクルダト!?)

聖杯戦争ではまず考えられない状況にアサシンは戸惑い、結果としてマリアの攻撃によって2騎から離れた河川敷の方へと追いやられた。

それを確認した少女——藍華はそれを確認してから次なる合図を出した。

手の中にあつた小石、それにはオルガ・マリー所長の魔術によって簡易閃光弾としての役割を持っていた。

それを空高く投げ上げて叫んだ。

「令呪によって命ずる！めぐみん、宝具発動！」

『分かりました、藍華さん！』

『我が人生の爆裂道!!!』

二度目の爆撃はライダーとランサーとの丁度中間辺りの位置に着弾した。

またも巻き込まれたランサーを尻目にライダーは短剣と鎖を使い、ビルに登った。

初撃は完全に不意打ちであったが、二度目は敵のマスターによる合図があつた。

故に音の反響により、宝具の放った敵の大まかな位置に検討をつけていた。

果たして、ビルから見て河川敷と真逆の方向に100メートル程行ったところに仰向けに倒れている人影を見つけた。

格好からしてまず一般人ではなく、手には宝玉の埋め込まれた杖が

に黒いブーツの爪先が僅かに刺さる。

そのまま刺さった足を素早く抜いて追撃を捌く。

大振りの凧ぎ払いを大きく飛び退いて、突きによる連撃を体の捻りと腕を薙刀の側面に添えていなす。

(少し、ヤバイかな……)

流石に直接的な外傷は受けていないが、魔力が恐ろしい勢いで無くなっていく。

藍華の魔術のデメリットがあるとしたら、それは対象の情報の複雑さと量によって魔力消費が格段に跳ね上がることだろう。

故にこの作戦において藍華の役目、それはマリアかマシユのどちらかの戦闘が終わるまでの時間稼ぎ。

体よく言えば『時間稼ぎ』、悪く言えば『囷役』

人類最後のマスターは自分から囷役をかってでたのだ。

特異点F 三幕目

燃え盛る冬木に通る未遠川、そこに架かる冬木大橋の袂にある海浜公園で二つの影がぶつかる、暗い空に火花を散らす。

「シヤア!!!」

「フツッ!」

アサシンの放った三本のダークをマリアが左腕のガントレットで弾き、お返しとばかりに短剣をアサシンに向けて投擲する。

しかし、その短剣はアサシンに当たる手前でまるで自ら避けるかのように明後日の方向へと飛んでいく。

「……厄介ね、遠くからの攻撃が当たらない。

何らかの力が働いてるのかしら」

「ハッ! 温イワ、温イワ! ソンナ攻撃ハ通ジンゾ!!」

「確かに厄介だけど、対処の方法がない訳じゃない」

マリアは武器を納めて胸に手を当てた。

当然アサシンもその隙を見逃さず一度に七本のダークをマリアに向けて放つ。

「Granzizel bilfen gungnir zizz
l」

黒い旋風と共に七本のダーク全てが空高く弾き飛ばされる。

続いてアサシンに向けて暴風が迸る。

アサシンはその風にわざと巻かれるようにして距離をとった。

アサシンが目を向けるとそこには黒い鎧を身に纏ったマリアの姿

「いや、それは無理ですね、私は爆裂魔法しか……あの宝具しか使えません」

「なあ!? 貴方それでもキャスターなの!？」

「失敬な! 私には紅魔族随一の魔法の使い手にしてアークウィザード、上級職の魔術使いですよ!」

「所長、めぐみんさんに構わずに作戦を続行してください!」

マシユが大盾を薙ぐとライダーが鎖を使つてまた間近のビルの中の入つていった。

藍華はどうにかなるかと思つていたが、想定以上にめぐみんが使えない……役に立たない……特殊すぎて、まともに戦闘ができていない。

彼女の出身である紅魔族は本来、非常に高い魔力適正と高度な魔術構築を得意とする一族である。

しかし、彼女は最強の攻撃魔法『爆裂魔法』に魅せられた結果、膨大な魔力を消費する魔法を極めたアークウィザードとなつてしまつた。

ちなみに彼女の宝具『我が人生の爆裂道』は対城宝具だけたつて威力は折り紙つきだが、放てば魔力が供給されるまで動くことすらできなくなつてしまう。

「分かつたわよ、やればいいのでしょ!」

オルガ・マリーが魔術で強化した小石をライダーの入つていったビルに向けて投げ込んだ。

小石に刻まれた魔術が発動し、それが引き金となつてビル全体に張り巡らされた術式が起動した。

ビルの下層部の柱がひとりでに瓦解し、文字通り崩れ落ちるかのようにしてビルが倒壊した。

いくらサーヴァントと言えどもビルの倒壊に巻き込まれては無事では済まされない。

を帯びた拳を叩き込む。

もちろん体には強化魔術をかけているが、それでも鉛を殴ったような感触と共に腕の関節が軋む。

戦闘が始まってもう何分経ったかなんて分からない。

ただ避けて、避けて、時間をより多く稼ぐために避け続ける。

攻撃は単調になってはいけない、弱者が強者と対峙する時の鉄則は常に相手の裏の裏をかき続けること。

正攻法は論外、どんな卑怯なことでも良いから一分一秒の命を延命し続ける。

「っ！おっと！」

「ヴォアアアア?!?!」

ランサーの攻撃を利用して街路樹を倒し、視界から外れる。

その隙に手近なビルの中に飛び込んで、ビルを駆け上がり、扉の空いた一室に飛び込んで扉を静かに閉めてから魔術を一度解く。

「っ！……はあ、は、はあ………かなりキツいなあ」

全力での魔術行使により磨耗した魔術回路が悲鳴を上げ、それに追随するように肉体的な痛みも上がってくる。

窓から下を覗くと、薙刀を乱暴に振り回しながらランサーが吠えている。

どうやらいったんはまけたようだ。

「……魔術回路の状態と魔力の残量から見て、これは少し厳しいかなあ。

マシユ達の方からの揺れからして、ビル爆破でもしたのかなあ……エグいことするなあ我が後輩は……」

場違いな考えを巡らしながら、再度ランサーの様子を窺おうと、窓

の方に寄った。

下にいるランサーは街路樹を手当たり次第に薙ぎ倒しながら、私のことを依然として探している。

「ふう〜、もう少しは休憩できそうだなあ。

何か緊張が溶けて喉が乾いてきた、水があるかなあ？

てか、水道通ってるの？これ」

部屋の中を物色するが冷蔵庫の中は全て腐っていて、製氷機も止まっている。

電気や水道といったインフラ設備はまるごと止まっているようだ。

「ん〜、ホントに何も無い……流石に水ぐらいはあってもいいんだけどなあ」

「おう、嬢ちゃん、水ぐらいなら持つてるがいるか？」

顔の前に差し出されたのは200mlペットボトルに入った天然水だった。

「あ、ああ！ありがとうございます！いや〜助かったよ、流石に乾燥しすぎて喉がカラカラでさあ……」

「そうだろうな、ずっと上から見てたが……」

「良くもまあサーヴァント相手にあそこまで食い下がれるもんだなあ」

「いくらサーヴァントでも人が相手なら、急所に攻撃を入れつつ死角から出ないように立ち回れば時間稼ぎぐらいは……」

「……私、今誰と喋ってるの!？」

そう思って背後に振り向くと、そこには青いドルイドが立っていた。

顔はフードで隠れているが、その暗闇から赤い目が此方を値踏みす

????????????????????

「アアアアアアアア!!!」

ビルの通路の壁が吹き飛び、黒い靄を纏ったランサーか雄叫びを上げながら突き進む。

すでに一階は穴だらけになり、これ以上の衝撃が加われば倒壊しかねない状況になっている。

理性の欠けているランサーはそんなことを考慮することはないだろう。

たとえば、ビルが倒壊してもランサーのステータスからすれば多少の傷はあっても死ぬことはないだろう。

「……………随分と暴れてるなあ、おい」

ランサーが声のした方向を向くとそこにはこの???で対峙することになった青いドルイドーキーキャスターが通路の影からゆっくりと出てきた。

ランサーはその姿を目にした瞬間、もうキャスターを自身の得物で風ぎ払っていた。

「ハ、ハハ！、ハハハハハハハハハハ!!!」

「いちいち煩いねえ、もうちつとは静かにできねえのか？」
「ヌウ!？」

しかし、ランサーがたった今風ぎ払ったキャスターは青く光る粒子となって消え、ランサーの背後にキャスターは再び現れた。

「ズアアアア!!!」

「遅えよ、アンサズ！」

キャスターの腕が空を切り、その軌跡を辿るようにルーン文字が踊る。

ルーン文字が一際眩しく発光し、数発の火球へと変化しランサーに向けて飛翔する。

屋外ならまだしも屋内、しかも狭い通路では回避はできず、なおかつ背を向けていたことも相まって全弾がランサーの背に着弾する。

ランサーはその衝撃によりビルを突き破りながら外に吹き飛ばされるが、空中で受け身をとり地面を滑りながら着地した。

「おら、余所見はすんなよ！」

ビルの中から飛来する火球を、今度は左右に動きながら避けてキャスターへと接近する。

流星のキャスターもランサーとの接近戦は避けたいものだが、今回は彼にも心強い用心棒がいた。

「そら、出番だぜ嬢ちゃん!!」

「!!!?!」

突然、ランサーの胸を鋭い衝撃が襲った。

何もいなかった筈の自身とキャスターの間に先程まで探していた少女が、手に持つルーン文字の刻まれた鉄剣を自身の左胸部に突き立てた姿で現れたのだ。

前もってキャスターのルーンにより視覚的、聴覚的に敵に気付かれないように身を潜め、ランサーの意識が完全にキャスターに向くまで待っていた。

そして、急激に動いたために解けてしまった隠密のルーンの残滓を

纏うようにしてランサーの心臓部――性格にはそこにある霊格を、これまたキャスターのルーンによって強化された骸骨から奪ったままの用済みの鉄剣で貫いた。

「ガア、アアアアアア!!!」

「嬢ちゃん離れな、これで終いだ!」

藍華が飛び退くとランサーの足元に魔方陣が浮かび上がり、その内側にいたランサーを飲み込むほどの火柱が立ち上ぼった。

火柱が完全に消えるとそこにはもうすでにランサーの姿はなかった。

「やれやれ、これで依頼達成だな嬢ちゃん」

「それじゃあ、報酬を貰おうか。この街で一体、何が起きたの?」

キャスターは目深にフードを被り直してその答えを口にした。

「……………聖杯戦争だよ」

特異点F 四幕目

「聖杯戦争……………て、何?」

「貴方、魔術については全くの素人ね!」

　　マリアさんとめぐみん、所長、マシユと合流した私とキャスターはこの街で起きた儀式ー『聖杯戦争』について聞いていた。

　　万能の願望器と言われる『聖杯』をめぐる七人のマスターと七騎のサーヴァントで行われる、血で血を拭うような戦い……………だったらしい。

「だが、俺達の聖杯戦争はいつの間にか別の何かに刷り変わってたんだよ」

「刷り変わっていたって、何ですか?」

「それはだなチビツ子『誰がチビツ子ですが、誰が!』まあ、カツカスんなや。」

……………たった一夜にして町は廃墟になって、人っ子一人いなくなっちゃった」

　　キャスターはおどけたように首をすくめた。

　　めぐみんが敵意むき出しの眼差しを向けるなか、マリアさんがキャスターに聞いた。

「しかし、この町はどうなってるのかしらね。

　　さつき、アサシンと戦つてるときに町を横切るように何本も亀裂が生まれていたのを見たのだけど」

「……………マリアさん、何処まで行ってたんですか?」

「え?そ、それは」

「マシユ、世の中には聞いちゃいけないこともあるんだよ」

質問の腰を折られたマリアが顔を背ける中、キャスターが口を開いた。

「そりや、セイバーの奴の仕業だ。

さっきの話の通り、俺らのマスターすら死んだ中で奴さん、水を得た魚のように暴れまくって町中滅茶苦茶だ。

んで、そのセイバーに負けた俺以外の五人のサーヴァントは相手の家来みたいに生きてる奴らを探してんだよ。

……て、言っても俺しか生きていちゃいねえがな」

キャスターは話を一度区切り、締め括った。

「これが今この町で起きてる全てだ。

次に、嬢ちゃん達の目的も教えて貰おうか」

「分かったわよ、私達カルデアは……」

所長が今の人類の状況、カルデアの使命について話す間にちよつと確認しておくことがある。

「マシユ、マリアさん、めぐみん。怪我とかしてないよね？」

「ええ、大丈夫よ。かなり余裕を持って倒せたわ」

「私達の方はなんとか、といった感じでしたね。

特にめぐみんさんの能力が使える……コホン、特殊過ぎて少々手こずりました」

「マシユさん、今使えないって言おうとしましたよね!?!? しましたよね!?!?」

「ん、めぐみん。ちよつと話があるんだけど」

「断固拒否します!……あ、すみません眼帯引つ張らないでください……」

「それ！」

「ギアアア!! イツツタイ、メガアア!!」

「貴方達、何してるのよー!」

ゴロゴロと地べたで悶絶するめぐみんを放っておいて、所長とキャスターの方に近づく。

話を聞くとキャスターの案内でこの特異点の主点となる、『大聖杯』の元へと行くらしい。

そこに行けばこの特異点の、聖杯戦争の謎に迫ることができる……可能性があるらしい。

「となれば、善は急げだ!」

????????????????????

砕けたアスファルトの道をサーヴァントの皆の力（めぐみんを除く）を借りて、この町の中心にある大聖杯の眠る山——円蔵山の麓にある学校で一晩明かすことにした。

幸い、キャスター以外のサーヴァントは一定の場所から動かないらしいので骸骨の群れだけに注意すれば安全、とのことらしい。

「マ〜シユ!」

「ひゃあ! せ、先輩!? 急に抱きつかないでください!」

「ごめんね〜」

教室の中で眠ることにした一行はかなり寛いでいる。

マシユと藍華がじゃれ合い、既に藍華によって仕置きを受けためぐみんは教室の隅で丸くなっている。

「…………マスター、あの、そろそろ」

「マシユ、なにか悩みがあるんでしょ？」

「な、何のことでしょうか。私は特に」

「マシユも私に負けず劣らず顔に出やすいからねえ」

それっきりマシユは黙ったままになってしまったが、その後にポツリポツリと悩みを打ち明けてくれた。

サーヴァント、いや英霊にはその個人の逸話を元にした特殊な力……『宝具』というものがある。

めぐみんならあの爆撃、マリアの場合はあの衣装そのものが宝具の一種である。

マシユはデミ・サーヴァント、他に類の無い英霊と人間のハイブリッドである故にその宝具を使いこなせていない、とマシユは口にした。

「だから、私は先輩のお役に立てているのか不安で…」

「マシユ、そんな事はないよ。……フウ、」

「っ！先輩、耳に息がっ！」

「私がカルデアの管制室内に入ったとき、もう誰も生きていないって本気で思ってた。」

「だからかな、私はマシユが生きてあることが本当に嬉しかった」

藍華はマシユの首に後ろから手を回して、マシユの体にもたれ掛かった。

「私が咄嗟に言った『生きること諦めるな』って言葉だけど、私が昔言われた言葉なの。」

私が魔術のせいで皆から迫害されたときに祖母に言われた言葉で、そのお陰で私は狂わずにいれたの」

藍華は昔のことを思い出す。

魔術を見た両親の罵声、友達からの誹謗中傷と軽蔑の眼差し、近所からの嫌がらせと怒号。

殴る蹴るはしてこなかった、それは私が異質だったから触れただけで殺されると思っていたからだろう。

親友と祖父母だけは私を理解してくれた。

だけど、いじめを気に学校は中退して祖父母から護身術を学び、私を被検体として捕らえようとしてくる魔術師を撃退し続けた。

「だから私が一番嬉しかったのは、マシユ、貴方が生きていてくれたことだよ」

「先…輩……………」

「マシユ……………」

マシユが振り向き、藍華と目が合う。

そして二人の目と目が結ばれ、少しずつ顔と顔とが近づいていき

……………

「……………マスターにマシユ、何やってるの？」

二人が視線を向けると戦闘時とは別の服を着たマリアが教室の扉にもたれ掛かって呆れ顔で見ている。

マシユが藍華を振り払って飛び退くが、当の藍華はマリアに抗議した。

「もう、マリアさん後もう少しでマシユのあられもないところに見られたのに」

「あ、あらっ!!先輩、最低です!!」

「全くもう、あの二人じゃあるまいし……………」

マリアさんが呆れ顔のまま教室の中に入ってきて、藍華の額にデコ

ピンをいれた。

「アイタツ！」

「早く寝なさい、明日は大変なんだから。」

今のうちに寝ないと、明日に響くわよ」

「……………まあ、それもそうか。ところで所長とキャスターは？」

「二人なら今、屋上でこの校舎に簡易的な結界を張ってるらしいわ」

「ふくん……………あれ？マシユとめぐみんは？」

「マリアが無言で指差す方を向くと、めぐみんとマシユとまるで猫のように隣り合って丸くなっている。」

その姿はとても愛らしく、マリアさんと数秒だが眺め続けていた。

じゃあ、私もその横を頂いて。」

「じゃあ、私も寝るね。マリアさんお休み」

「ええ、お休みなさい……………」

????????????????????

「……………下の子達はみんな寝たわよ」

「そうかい、アンタも寝な。アンタも重要な戦力だからよ」

「お気遣いどうも、でももう少し起きてるわ。」

とところで所長さんは？」

「おう、眠りのルーンを掛けたらコロツと眠ったわ」

どうやら所長は夜を徹して明日の決戦の準備をしていたのだが、根を詰めすぎると良くないのでキャスターが無理やり寝かせてルーンで保護した教室に入れてきたそうだ。

「貴方も大変ね。私達が加わった分、負担も増えたのでしよう?」

「いんや、そういう訳でもねえよ。あの盾の嬢ちゃんは明日の決戦の鍵になるし、チビツ子の宝具は奴に対しての有効策になるだろう」

「……………貴方から見てあの子はどう見えるの?」

「マスターの嬢ちゃんか?ありや、まともな人間じゃないな。」

いや、違うな。アレはマトモじゃいられなくなった人間だな」

「マリアもキャスター、いや『クー・フリーン』も常人とは一線を画した世界で生きてきた。」

クー・フリーンは、故郷の為に戦い続けた戦士。

マリアは、全世界を二度も救った救世主の一人。

だからこそ人を殺す／倒す術を身に付けることが自然だった。

だが、マスター……………衣荷 藍華は違う。

ただの少女がいきなり魔術の世界に問答無用で放り込まれた。

それでいて、今までの世界から無理やり切り離された。

「あの子の目はいつも笑ってる、本心で笑ってるの。」

どんな些細なことがあの子にとってはそんなに愛しい物なのね」

「あの嬢ちゃんはこれからもっと辛いことにぶち当たるだろうなあ。」

それでも、絶対に曲がらないだろうなあ」

「それは英雄としての経験談かしら?」

「それでもあるかもな、ハッハッハ!!!」

????????????????????

一晩明けた次の日、藍華が腕を見ると昨日使って二面に減った筈の令呪が三画に戻っていた。

所長曰く、カルデアからのバックアップで一日に一画だけ令呪を回復させれる、とのことらしい。

その時のキャスターは複雑な顔をしていた。

「こんなに大きな洞窟があつたなんて、これは全て天然なんですか？」

「違うわよマシユ、半分天然で半分人工つてところね。」

「この洞窟に目をつけた魔術師が代々に渡って増築したのね」

「大きいけど、めぐみんの宝具は使用禁だからね」

「な、何ですか!？」

「こんな狭い空間で爆撃何てしたら、みんな生き埋めになってしまうわよ」

円蔵山の地下の大空洞にやって来た一行はキャスターの案内の元で地下深くの大空洞に……『大聖杯』に続く回廊を歩いていた。

「お嬢さん方、そろそろ気合いいれとけよ？」

「こつから先は敵の本拠地のど真ん中だからな」

「という訳でキャスター、あちらに居るのは貴方の言つてた家来みたいになつたっていう人かしら？」

『………フン、そちらの援軍は中々に手強そうじゃないかキャスター』
「言つてろ、聖剣信奉者。流星にこの人数相手にたった一人で挑む気か？」

キャスターとマリアの目線の先にはライダーやアサシン達と同じく黒い霧のようなものを纏った人物が立っていた。

その手には大きな黒塗りの洋弓を持っていることからアーチャーのサーヴァントだと推測できる。

「別に信奉者になった覚えは無いのだがな。

それに、此方にも心強い援軍がいるものでな」

「?.....!?!、まさかテメエ!!」

「そのまさかだよキャスター、流石の君でもアレの相手をする事は出来ないだろう?」

「ちよ、ちよつと貴方達勝手に話を進めないでちょうだい!

キャスターも詳しく説明しなさい!」

所長が憤慨する中、キャスターはいきなり振り返り杖を振り上げて唱えた。

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社——

倒壊するはウイツカー・マン!」

キャスターの詠唱と共に巨大な藁人形のようなものがキャスターの背後から出現し、その巨大な腕を振りかぶり、

「ちよ、キャスター!なにを」

「はメエ等、そこをどけえええ!!!」

「」

「????????????!」
キャスターの宝具『灼き尽くす炎の檻』の腕と藍華達の背後から現れた黒い何かの斧剣が激突し、こともあろうか『灼き尽くす炎の檻』の片腕が弾き飛ばされた。

「チィ!やつぱり無駄か、お嬢ちゃん気い付けろ!

ソイツはギリシャの大英雄『ヘラクレス』だ!」

特異点F 五幕目

大空洞の壁面を空中でぶつかる火球と刀剣が弾けた爆発が彩る。その隙間を縫うようにしてマリアが銀色の衣装を身に纏い、アーチャーに向けて飛翔する。

しかし、アーチャーが腕を振るとマリアの進行方向上に巨大な剣による壁が出現する。

「っ！本当にやりにくい相手ね！」

「誉め言葉として受け取っておこう」

マリアは大きく迂回することになり、その間にアーチャーは四本の矢を弓に構え引き絞る。

「喰らい付け、『赤原獵犬』!!!」

フルンデイング

アーチャーの矢が不規則な軌跡を描きながらマリアに殺到する。

マリアは咄嗟に蛇腹剣を取りだし全ての矢を弾くが、赤い鏃の矢達はまるで何事もなかったかのように再びマリアに襲いかかる。

マリアが短剣を射出して迎撃するが、数で勝つていても強度が違いすぎる。

打ち漏らした数発がマリアに降り注ぐ。

「吹き飛びな、アンサズ！」

そこにキャスターの援護が入り、残った赤原獵犬を全て粉々に砕いた。

マリアは新たな短剣を取りだしアーチャーの懐に入るが、アーチャーの造り出した中華剣により迎撃されて後退を余儀なくされる。

「キャスター、本当に彼はアーチャーなの？」

「マ、マスターさん！どうかしないよ、マシユが死にますよ!？」

「分かってる、分かってるよ！でも、他に手段が一つもないの！

出来るとしたら二人がアーチャーを倒すまで時間を稼ぐことしか出来ないの！」

「キヤスター、貴方はマスターの指示に従いなさい」

「で、でもマシユを見殺しにするなんて！」

「一番辛いのはそれを選択したこの子なのよ！」

そう、この手段を選んだその時から私達の命と人類の未来は今、マシユの心に懸かっている。

そんな事を強制した自分の不甲斐なさに、そして何もできない無力さに今にも押し潰されそうになっている。

「??、
????、
????」

「はあ……つ!!……つああああ!!!」

マシユも背に守る私達を守るために必死になって戦っている。

激しい衝撃がマシユの細い身体に折ろうと駆け巡る。

それでもマシユは諦めない、絶対に諦めていない。

マシユの背中には自分に命を託している仲間の命が乗っているから、だから折れることはない。

「はあ、はあ、はあ……ま、まだやれます！」

「……????
??????」

マシユの姿はあまりにも美しかった。

だからだろうか、ヘラクレスから滲み出していた狂気が一瞬だが和らいだように見えた。

だが、ヘラクレスは再度大空洞を揺るがすほどの雄叫びを上げて手に持った斧剣を背中に当たるまで引き絞り、マシユを狂気に染まった赤い瞳孔で睨む。

ミシミシという筋肉の軋む音と踏み締めている足が地面を抉る音がはつきりと耳に届いてくる。

アレを食らえば、マシユは二度と立ち上がれなくなる。

そう!?! 理解してマシユに向けて叫ぼうとした時にはもう遅かった。

「?、」

「……………ああああ」

「マシユ?!! ウウウウ!!!」

神速の九連撃がマシユを盾ごと吹き飛ばした。

マシユはそのまま数秒間宙を舞い、何度もバウンドしながら私とめぐみんにぶつかってきた。

身体に強化魔術をかけていても、ズシリと重い衝撃が伝わってきた。

慌ててマシユを抱き起こす。

「マシユ、しっかりと！マシユ！」

マシユの額からは止めどなく赤いナニカが刻一刻とポタリ、ポタリと落ちていく。

何度目になるか分からない轟音とともにキャスターが転がり込んでくる。

遠くではまだマリアがアーチャーと剣撃を交わし合っている。

「嬢ちゃん、しっかりとしな！何も打つ手無しじゃあ、ジリ貧になんぞ！」

「マ、マスターさん！」

「そ、そうよ！貴方なんとかしなさいよ！」

「このままじゃ、し、死んじゃうじゃない！」

『死ぬ』

そんなことを言われても打つ手はない。

あの大英雄を倒す術なんて初めから揃ってなごいなかった。
しかし、それでも最後の足掻きにマシユにある魔術を行使した。

「アウエイクン解析始動コードエラー——抽出不可——」

どうやら、最後の手も今の状況では使うことができない。

その時、彼方でマリアと対峙するアーチャーと目があつた。そして、

私に向けて矢を引き絞つたその口が、ニタリと三日月を描いた。

「……………カラドボルゲII偽・螺旋剣！」

『……………それだけなの？それがわたしのかちなもの？』

『藍華、人の価値なんてその人しか分からんさ。他人の意見なんて、ただの一面を取ったに過ぎないんじゃないよ』

『価値の有るか無しかで人を選ぶなんざ、馬鹿のすることじゃ。』

『価値つてもものしか考えられない、それは悲しいことじゃよ』

『でも……………』

わたしはわたしのかちがわからないよ？』

『それはそうだよ、価値つてもものは自分のうんと深いところにあるからね』

『儂らも自分の価値に気づいたのもつい最近じゃよ』

『？ジ〜ジとバ〜バのかちってなに？』

『それはな（じゃな）』

藍華、お前を愛することが出来ることだよ（じゃよ）』

『……………わかった、わたしはわたしのかちをせ〜つたい、みつけてみせる！』

ジ〜ジやバ〜バよりもはやく、みつけてみせるから！』

????????????????????
(シブンニハ、カチガナイナドバカナコトダ)

『……………すっかり忘れてたよ、でも昔のことだ』

(カコノコトナド、イクラデモフリカエレル
ジ〜ジトバ〜バノ、イツテイタコトダロ?)

『……………策がないからどうしようもないじゃん』

(サクナラアルサ、オマエガソノカギダ)

『私が鍵?』(……………ガ、オマエニハアルダロ?)

『……………そうだね、まだまだマシユ達との旅は!』

(ソウダ! コレマデノクソツタレナジンセイヲ!)

『引っくり返してくれた皆との日々!』

『終止符を打つ訳には、絶対にいけない!』
(コンナトコロデ、オワラセルモノカヨ!!)

白の生地に映える黒い帯には、空を流れる天の川が細やかに描かれている。

そして、藍華の周囲には三つの球体がまるで藍華を守るかのように一定の周期で回っている。

誰もが押し黙る中で一人アーチャー……エミヤだけが藍華の装束を見て驚愕していた。

(馬鹿な!?彼女の纏っているあの衣は間違い無く聖骸布!)

彼女は聖骸布を一から生成することができるとでというのか!?)

ならばと、アーチャーは考え再度『偽・螺旋剣』を藍華に向けた。

しかし、彼の心眼(偽)がそれを止めるように警告を出したため矢を納めた。

それが彼にとっての致命的な隙となってしまうた。

「はああああ!!!」

「っ!なに!?!」

剣の檻を断ち切りながらマリアがエミヤへと飛翔した。

慌てて干将・莫耶を生成したが遅かった。

マリアの右手が動き、短剣を左腕のガントレットに接続。

それにより短剣の刃が拡張しロングブレード並の長さとなった。

マリアはさらに腰のブースターの出力を上げ、

『銀^Sの左腕^R、償[†]いの光^Nを放^Dて』エエエ!!!」

!!すれ違い様にエミヤを干将・莫耶ごと切り放った。

????????????!!
ヘラクレスが我に帰り、マシユゴと藍華を潰さんと斧剣を振り上げ

る。

しかし、それよりもはやく藍華が自分の周囲を旋回する球体を掴み、ヘラクレスへと向けて唱えた。

「アンサラー………斬^フり^ラ抉^ガる^ラ戦^ラ神^ッの^ク剣！」

球体が突如刃となり、光線となってヘラクレスの心臓を名の通り斬り抉っていった。

ヘラクレスとエミヤはそのまま金色の粒子となって溶けながら、消えていった。

藍華は自分の姿を見て、静かに目を閉じた。

「ああ、これが私の本当の価値だったんだ」

「私の魔術が性質の付与ってことは知ってますよね？」

「ええ、貴方のパーソナルデータには目を通してあるわ。」

貴方の起源が『衣』なんて言う位置のわからないだっこともね」

「なら話は早いです、私のあの魔術は付与と投影の複合魔術なんです。」

いくら付与魔術でも完全に性質を丸写しすることはできません。」

なんで、投影魔術で造り出した衣に解析した対象の性質を限界まで付与させて、それからその衣自体の性質を付与させてるんです。

私の魔術は対象に直接触れ続ける方が出力が高くなるんで、この方が本来の性質を限り無く原物に近いまま使用できるんですよ」

その説明を聞いていた所長は啞然としていたが、そんな事は全く気にせずにマシユやキャスターのいる方に駆け寄った。

マシユはキャスターの治癒のルーンにより、治療を受けている。

『もう体力は回復したのでこれからも防御は任せてください！』と、元氣そうに笑いかけてくる。

マリアさんにも労いの言葉をかけて、私は大空洞の隅で小さくなっているめぐみんの元に近づいた。

「めぐみん、何してるの？」

「っ！マ、マスターさんでしたか。」

いきなり話しかけないでください、ビックリするじゃ無いですか……………」

「……………無力な自分を戒めるなんて随分とらしくないことしてるね」

「……………やっぱ、バレましたか」

めぐみんはどうやらさつきとの戦闘で何もできずにいたことが、悔しくて仕方ない……………いや情けなくて仕方ないようだ。

サーヴァントとしてマスターを命を変えても守らなければならないと、頭では思っているけど身体が動かない。

死んでも大丈夫と言われても、嬉々として死んでいく人など限られている。

私はいつでもマイペースじゃあ
!!!!!!

「????????????????????????????????????
……ほう、面白いサーヴァントがいるな」

「なっ！テメエ喋れたのか！」

休憩を終えて、いよいよ大聖杯のある大きな空間に辿り着くと、そこには黒く染まった剣を地面に突き立ててこちらを待ち構えているセイバーの姿があった。

キヤスターとセイバーがいくつかの言葉を交わすが、不意にセイバーが剣を天蓋に向けて真っ直ぐに掲げ上げた。

キヤスターから聞き、アーチャーの言葉からアレが聖剣、あのバーサーカーすら葬った一撃が私達に向けられる。

空間が軋み、セイバーからは黒い魔力が螺旋を描いて剣へと注がれていく。

「マシユ！私達の全てを、その盾に懸けてるよ！」

「マシユ、決して下は見ずに前だけを見なさい！」

「マシユ・キリエライト、自身の使命を果たしなさい！」

「嬢ちゃん、来るぞ!!」

マシユが私の前に盾を顔前に構え、セイバーを見据える。
そしてセイバーはその手に握る聖剣の穢れし真名を宣う。

「卑王鉄槌……極光は反転する……光を呑め……」

『エクスカリバー・モルガン
約束された勝利の剣』
!!!!」

黒く染まった聖剣の一撃がマシユごと私達を呑み込まんとばかりに襲いかかる。

だが、マシユは、私の後輩は決して震えてはいない。

彼女の目に写るものは黒き極光ではない、それは自分を抱きしめ守ってくれたマスターの横顔と燃え盛るあの管制室で自分に力をくれたあの英霊の姿だった。

「私はここで、倒れるわけにはいかないんです！」

マシユの構えた盾から蒼く光る障壁がマシユの前に展開され、その障壁と黒き極光がぶつかった。

マシユな盾が裂いた極光が私達の左右を通り過ぎる。

怯えてはいけない、マシユの力を信じ抜くことが今の最善。

はたして、

「ああああああああああ
!!!!!!!」

聖剣からの極光が止むとそこには、傷を負いながらも盾を構え続けたマシユの姿があった。

マシユの身体がグラリ揺らぐ、すかさずマシユを後ろから抱き込み笑いかける。

「ありがとう、マシユ。本当に私の後輩は最高だよ」

「先輩……私、やりましたよ……」

「うん、ゆっくり休んでね」

マシユを所長とめぐみに預けてマリアとキャスターに向けて叫

ぶ。

「第二波は防げないから、今のうちに倒すよ!」

「分かったわ、マスター少し本気を出すから。」

指示は頼んだわよ!」

マリアがそう口にする、何処からともなく歌が戦場に流れ始めた。

皆が……セイバーすら啞然とする中、マリアか口を開く。

「♪真の強さとは何か?探し彷徨う

♪誇ること?・契ること?・まだ見えず」

「おいおい、何急に歌い出してんの?・おたく」

キャスターの言葉にマリアは歌いながら『仕方ないじゃない』とでも言いたげな視線を投げかける。

しかし、すぐに視線を外しセイバーへと翔んだ。

だがその速度は……今までは比喩物にならないほどの速度だった。

「っ…なに!」

セイバーの直感による未来視に追従するほどの速度でマリアの短剣が襲いかかる。

マリアの纏うギア、シンフォギアは聖遺物という旧世代の異端技術を応用して作られた特殊な戦闘衣装である。

本来の世界線では歌を歌わなければギアを纏うことができない、しかし英霊となった今は歌を歌うことはステータスの大幅な上昇を生み出している。

故にステータスのほぼ全てが限定的にBランクに達しているマリアはステータスにおいてセイバーを……アーサー王を僅かに凌駕す

『黒より黒く、闇より深き漆黒に

我が深紅の混交を望む給もう』

『覚醒の時来たれり、無謬むびゆうの境界に堕ちし理、

無行むぎやうの歪みとなりて現出せよ！』

『我が人生の爆裂道』

!!!!!!

キヤスターの『灼き尽くす炎の檻』を残った腕を吹き飛ばすほどの爆発が、その拳の中から解き放たれた。

爆炎は『灼き尽くす炎の檻』を焼却し、天蓋を吹き飛ばすほどの火柱が立ち上った。

めぐみんの汚名返上に十分すぎる一撃をモロに受けたセイバーは、真つ逆さまに地面に叩きつけられるようにして落ちてきた。

鎧はほとんどが砕け散り、聖剣は担い手から少し離れたところに真つ直ぐに突き立っている。

「…………ハア、私としたことが最後の最後で手が緩んでしまったか。

まあいい、私一人では運命など、どうにもできなかつたからな」

「おい、セイバー。テメエ、何を知ってやがる」

「いずれ貴様も分かるだろう、アイルランドの光の御子。

——グランドオーダー、聖杯を巡る戦いはまだ始まったばかりなのだと……」

そういつてセイバーのサーヴァントは消滅した。

それに続くようにして、置き台詞を残してキャスターも消滅していった。

セイバーのいた場所には金色に光る杯——聖杯が漂っている。

「……ふう、みんなお疲れ様！」

「やりましたね、先輩！」

「若干歌い足りなかった気がするけど、まあいいわ」

「めぐみん！よかったね、トドメ刺せて」

「フッフッフ、私の力もぎつとこんなもんですよ！」

「よしよし、いい子いい子……」

倒れたままのめぐみんの頭を撫でてから、さつきから一言も喋らない所長へと視線を向けると所長は一人ブツブツと呟いている。

「……冠位指定……、」

あのサーヴァントが何故その呼称を……」

「どしたんですか、所長？浮かない顔して」

「あ、ああ、気にしないでちょうだい。」

それよりも、衣綺藍華及びマシユ、よくやりました

これにて、ファーストオーダーは終了よ。

不明な点多いけれども、あの水晶体を回収してカルデアに帰還しましょう」

所長の指示に従って聖杯を回収……しようとしたが、突然聖杯が独りでに大聖杯の外縁へと浮かび上がっていった。

慌ててマシユと所長の元へと戻り、聖杯の行方に目を凝らすと、そこには独りの人影が見えた。

それは、私がカルデアの内部で顔を合わせたことのある人物だった。

「…………レフ・ライノール教授、随分と久々の再会ですね？」

この状況を読んでたと思えない劇的な登場ですね」

「フン、相変わらず減らず口が多いな衣碕君。」

一度、気品や上品さを身に付けてはどうかかな？」

そこには私がカルデアにいた頃に一目で嫌いになった人物、

近未来観測レンズ『シバ』の提供者、レフ・ライノールが物凄い人の悪い顔を浮かべてながら佇んでいた。

特異点F 七幕目

『レ、レフだって!?彼がそこにいるのか!?』

「レフ教授!?生きていらっしやっただんですか!?!」

「レフ……レフなの!?!ああ、良かった!いきっていたのね!」

「っ!所長、なにやってんですかあ!!」

久々に通じた回線からドクターの声が聞こえてくる。

明らかにあの時の爆発の中で、無傷でいられるはずがない。

それだけでレフ・ライノールへの不信感は強くなる。

だが、彼女にはそんな事を考える余裕は無かったのだろう。

いきなり駆け出そうとした所長の腕をつかんだが、彼女はそれを振り払ってレフ・ライノールの元へ行ってしまった。

その背中をに追い付いて止めることはできたかもしれない。けども、レフから滲み出るとす黒いナニカのせいで迂闊に動くことが出来なかった。

マリアとめぐみんにもなるべく動かないように、指示を送っておく。

視線の先ではレフと所長が言い争っている。

そしてレフが顔前に聖杯を掲げると大聖杯のちようど真上に歪みが生じ、そこにカルデアの管制室が映し出された。

いや、このカルデアスからの存在圧から見て恐らく本物で空間を繋げたのだろう。

しかし、その後の現象に私は凍り付いた。

所長がゆっくりと空中に浮かび上がり、カルデアスの方に少しずつ近づいていった。

反射的に走りかけたが斬^フラ^ラガ^ガラ^ラッ^ッの剣はこの状況では役立たず

で、それにもう間に合わない。

所長の身体がカルデアスの中に溶け込むようにして消えていった。

「つつ!!!」

「先輩!抑えてください!」

今行ったら先輩も同じように殺されます!」

「ほう、流石はデミ・サーヴァントだ。

私が根本的から違う生き物だど感じ取っているな。

では、君達に改めて自己紹介をしよう。

私はレフ・ライノール・フラウロス

貴様たち人類を処理するために遣わされた2015年の担当者だ」

????????????????????

……数時間前に起きたことが私の頭の中をかき乱す。

吐き気と頭痛が際限なく襲い掛かってくる。

整理されていたマイルームの壁には幾つもの血の線が走り、それが自分の指先から滲み出ていることを遅まきに理解した。

所長を止められなかったのは私、所長を見殺しにしたのも私、だから全て私が悪い。

「はあ、はあはあ、は、はあ、はあ………」

喉が削られたかのように疼く。

声はすでに渴れて、浅い呼吸を繰り返すだけで痛みがする。

そんな姿をマシユ達に見させるわけにはいかないだろう。

ここまで取り乱したのは『アノ日』以来になるだろうか。

苦しくて、苦しくて、でも死ぬことはできない。

死にそうになったことなんて、幾らでもあった。

けれど、肝心な時になって自分は死ねないなんて、できすぎた喜劇だ。

レイシフトから戻り、マシユと再会し、マリアとめぐみんにカルデアを案内して直ぐにこの部屋に戻ってきた。

そこからはよく覚えていない。

気付けば服や壁には血が付き、シーツと枕は引き裂かれ、ベッドは足が砕けて、観葉植物もバツサリ斬られている。

無意識に魔術が暴走でもしたのだろうか、身体中の魔術回路が傷付いているし、魔力も若干だが減っている。

果ての無い無力感と虚脱感が身体を蝕む。

ジ〜ジとバ〜バに言ったことをこの特異点で思い出してしまったことも反動を大きくした原因だろう。

「……………私の意味…価値…意義…そんなもの無いよ」

人を殺した人に価値があるなら、それは人の悪性の手本というレツテルだろう。

「……………これじゃ、めぐみんに言えた義理じゃないなあ」

「ああ、全くだね。」

人の価値を一人で決めきるなんて、ただの無駄骨だよお？」

プシユ、という音と一緒にマイルームの扉が開き、美術書等で見たことのあるモナ・リザにそっくりの人物が入ってきた。

彼女はかの有名なレオナルド・ダヴィンチその人らしい。

よくモナ・リザはレオナルド・ダヴィンチの自画像だったなど言われていることは、あながち間違っただけならいい。

「ほら、コーヒーでも飲んで落ち着きなよ。」

「そんなんじゃない、せっかくの美人が台無しだ」

「……………ダ・ヴィンチの方が美人ですけどね」

「お褒めに頂きありがとうございます、素直になるのも必要だよ君」

ダヴィンチさんの淹れてくれたコーヒーは、今まで飲んだ中で一番美味しかった。

しばらくダヴィンチさんは私がコーヒーを飲みのを傍らで見ている。

そんなに面白いだろうか？私は。

「君は、自分が可愛いとか思ったこととか無いのかい？」

「そこまで美人でも美少女でも無いですし、

美少女はマシユやめぐみんのことを

美人はマリアさんやダヴィンチさんのことを言うんですよ」

「ふくん、でもこの部屋で歌い踊っていた君も中々のものだったよお？」

「ブッフオオオ!!!??」

み、見られてたの!?!何時!?!何処から!?!

「各マスターのメデイカルチェックは医務室のモニターからするか
ら、ロマンが作業傍らでちよつぴりモニターで君の部屋を覗いてたんだよ」

「……………」

「おいしい、聞いているのかい？」

「……………因みに見たのはダヴィンチさんだけですよね？」

「いや、動画を焼き増しして職員に配り終えたところだけど」
「何しとんですかアンタはあ!!!!」

「てことは、私が歌いに歌った約十曲がカルデア内で聴かれていると!?
あまりの恥ずかしさに悶死してしまいそうだよお!!!」

「ハハッ! やつと明るい顔になったね、君!」

「え……………あ、」

「君、帰ってきてからずーっと塞ぎ込んでてみんな心配してたんだよ?」

「……………流石に立ち直り憎いですよ。」

「自分のせいで……………所長が死んだんですから」

今でも瞼の裏に所長の顔が、カルデアスに呑み込まれる時の所長の顔が明確に浮かんでくる。

あの時、別の行動を起こしていれば所長が死ぬこともなかったのか
もしれない。

そう思うと、自分のしたことに関わりが潰されそうになる。

「ん、あの状況ではアレが最善だったって私は評価してるし、どうせあの状況からオルガマリーを救うことはできなかつたよ」

「でも、もしもの解決策が他にあつたら」

「あの子はね、生まれながらに才能は人一倍持っていた。」

けれども、どうしてかレイシフトの適正だけは持っていなかった。

そこで私はモニター越しでロマンが格闘する最中に管制室に行つてみたんだ。

……………そこで私はオルガマリーの身体を見つけた」

「……………え?」

それはおかしい。

何故ならあの時、所長は私達と共に冬木にいた。なら、所長の肉体は管制室内には存在しないはずだ。

「正確にはオルガマリーの欠片を見つけたんだ。

あの爆発、どうやら彼女の真下が爆心地のようですね。

……………指一本しか残っていなかったよ」

「……………」

「だから私は確信した。

トリスメギストスが彼女の残念粒子を検知し、それをレイシフトによつて冬木に送ったんだ。

レイシフトは霊子化した魔術師、サーヴァントを過去に送る装置だ。

故に肉体のなくなったオルガ・マリーはそこで初めて、念願のレイシフトの適正を手にいれたんだ」

「……………」

「結論から言うと彼女と初めて冬木であつた瞬間、いや、彼女が冬木の地を踏んだときからこの結末は定められていたんだ」

「……………そうだったんですか……………」

何だか自分の悩みが全部吐露だったと一瞬感じたがすぐに打ち消した。

所長のことは忘れるわけにはいかないだろう。

所長のためにもこの私に課せられた使命を果たさなければならぬ。

「ダヴィンチさん、ありがとう。

私、少し立ち直れた気がします」

「いゝよいゝよ、それにさん付けじゃなくてちゃん付けでいゝよ♪

マッシュやロマンは医務室にいるから行ってきなよ」

「アリガト！ダヴィンチちゃん！」

ダ・ヴィンチちゃんにお礼を言つて、私はマイルームから駆け出して医務室へと走つて行つた。

廊下で職員とすれ違ふ度に声をかけられる。

『頑張れ、歌姫！』『青春を謳歌しなさいよ！』『歌姫、よくやった！』

『歌姫！』『新曲待ってるぞ、歌姫』

………やっぱりダ・ヴィンチちゃんを一発ぶん殴りたくなつた。

「………やれやれ、凡人のカウンセリングは天才の仕事じゃないんだけどねえ」

ダヴィンチは肩をすくめて、腰掛けていたベッドから立ち上がった。

そして、改めて彼女の部屋の惨状を見渡した。

「ん〜、結構汚れちゃってるけど、まだまだ綺麗にできる範囲内だね。

天才が隅から隅まで綺麗にしてあげるのだからありがたく思いなよ、人類最後のマスター！」

????????????????????

医務室ではマシユがロマンに簡易的な検査を受けていた。

生まれた経緯から少し病弱なマシユだったが、今回のデミ・サーヴァント化により体力、筋力が上がり健康的な水準まで検査結果が上がっていたのだ。

ロマンとマシユが談笑し合っていると医務室の扉が開かれ、藍華がマシユの背に向けて飛び込んできた。

「マシユ~~~~!!!」

「うひゃあ!せ、先輩驚かさないてくださいよ……」

「ゴメンゴメン、でもマシユが元気になってくれて良かったよお……」

「その点で言えば、今のマシユは以前よりも健康的な身体になってるよ。」

デミ・サーヴァント化による影響だけど、これは良い弊害だったね」

「あ、戦闘前の事前警告が遅いドクターじゃないですかあ……」

私決めましたよ、人理修復、してやろうじゃないですか」

その言葉にロマンは目を見張ったが、すぐにいつもの柔らかい目に戻った。

マシユも肩越しに私の方を見てくる。

その目には私に対する『信頼』と『羨望』が込められていた。

「人理を、人類の未来を取り戻す大仕事、やらせてもらいます。

私にできることがそれなら、私は全力で頑張ります!」

「そうか、分かったよ……衣碕 藍華君」

「ハイ!」

ロマンが居住まいを正したので、私もマシユの背中から離れて踵を揃えて真っ直ぐに立つ。

「これよりカルデアは前所長オルガマリー・アニメスファイアか予定し

ていた通り、人理継続の尊命を全うする。

目的は人類史の保護、及び奪還。探索対象は各年代と、原因と思われる聖遺物・聖杯。

我々が戦うべき相手は歴史そのものだ。君の前に立ちはだかるのは多くの英霊、伝説となる。

それは挑戦であると同時に、過去に弓を引く冒涇だ。

我々は人類を守るために人類史に立ち向かうのだから。

けれど生き残るにはそれしかない。いや、未来を取り戻すためにはこれしかない。

……たとえば、どのような結末が待っていようとも、だ。

以上の決意を持って、作戦名はファーストオーダーから改める。

これはカルデア最後にして原初の使命。

人理守護指定・Gグランド・Oオーダー」

ロマンはそこで一度言葉を切って、力強く続けた。

「魔術世界における最高位の使命を以て、我々は未来を取り戻す!!」

幕間の物語 序章↓↓↓第一章

『……………お〜い、藍華。早く起きなよ』

目を開けると、そこは何もない真っ白な部屋の中だった。けれど、この部屋には見覚えがある。

この部屋に私が初めて迷い込んだのは魔術の存在を知覚した頃、私が身の回りから迫害を受けていた頃だった。

それから何度もこの部屋には来ている。当然、この声の主のことも知っている。

「……………久しぶりだね。それにその喋り方、逆に不自然だよ」

『……………クツクツク……………ヤハリソウカ、些力芝居ヲウツテハ見タノダガ』

私が声を発すると黒い影法師が私の影から離れて、私の目の前で立ち上がった。

全身が墨で塗られたように真っ黒で目と口が白い空洞となって、今は目と口を三日月のように歪めている

「で、アンタが私の夢を弄ってまで出てきた理由から聞こうか」

『相変ワラズ話ガ早クテ助カル、オマエガアノ特異点デカヲ使ツタコトニツイテダガ……………』

「……………大丈夫、アノ時ほどのダメージは無いから。

アンタ、見た目に似合わず心配性なんだねえ」

すると、影法師がその身体を震わせながら笑った。

『ハッハッハ!!!オレヲソクナ風ニ、カラカエルノハオマエクライダロ

ウ。

「このオレガ他人ヲ心配シテイルヨウニ見エルカ？」

「見えるよ、アンタにとって私は大事な依り代なんでしょ？」

しかし、私の言葉を聞くと影法師は嗤うのを止めた。

『ソノ話ハ、マタ別ノ機会ダ』

「おい、露骨に話を反らすなよ」

『用件ハモウ済ンダ。モウ、ココニイル必要モナイダロウ』

「いきなり呼びつけておいて、それはないでしょ。」

あ、ちよつと！マジで私を弾き出すつもり!?

待って、まだ話は」

そこで、私の意識は絶ちきられた。

次に目を開けたときには、カルデアのマイルームのベッドの中だった。

「くっそく、自分勝手すぎるだろアイツ！」

思わず私は愚痴を溢した。

????????????????????????????

「?カルデアの調理師ですか?」

私はカルデアの食堂で皿を洗いながらマシユにこのカルデアの食堂事情について聞いた。

今朝の一件から心を入れ換えて、食堂で朝食を……取ろうとしたのだが調理師がいなく仕方なく自分で軽めの朝食を食堂で合流したマシユの分を合わせて二人分作った。

といっても、簡単な炒飯ぐらいだったけど。

「カルデアは国連直轄の研究機関なので、皆さん食事は大抵サプリメントや栄養食ぐらいで済ませています。

そもそも料理のできる人が少数なので食材が余ってしまう始末です」

「うわ、確かにドクターも少し痩せぎみだからなあ。

なんか差し入れでも作っていいのかなあ」

「……職員全員分が必要になりますよ?」

「たかが女子校生の手料理にそこまでマジにならなくても……」

カルデアの食事情に幻滅していると、食堂の入り口からマリアさんとめぐみんが入ってきた。

マリアさんの髪が少し濡れているから、シャワーでも浴びてきたのだろう。

「マリアさん、めぐみんオハヨー」

「朝から元気ねマスター。朝食は何処で取れば良いのかしら」

「あ、セルフサービスでよろしくお願いします」

「な、カルデアはそんな不憫な所だったんですか!?

私帰ります、座に帰ります!」

そんな事を言うめぐみんを放っておいて、マリアさんのためにもう一度食堂の調理場に入って炒飯を作る。

当然その匂いに刺激されためぐみんが食い付いてくる。

「マ、マスターさん！私の分もありますよね!？」

「あ、めぐみん座に帰るっていつてたからマリアさんの分しか作ってないよ」

「何ですかあ!?!帰るのやめますから作ってくださいよお!」

「……それで良いのか英霊」

「空腹とひもじさにはどんな者でも勝てません!」

そんなこんなでめぐみんの分も作ってあげることにしたけど、流石に毎朝朝食を作るのも苦勞する。

しかも自分で言っってはなんだがレパートリーが少ないから、流石に飽きるし……!」

「そうだ、料理人のサーヴァントを召喚しよう!」

「……マスター、貴方サーヴァントを何だと思ってるの?」

「ですが先輩、現代料理に精通した英霊というのはあまりにも少なすぎるのは……」

「何とかなるなる!そんじや早速召喚ルームに急ぐとしましょうか!」

食堂を足早に飛び出し、ドクターとダヴィンチちゃんから英霊召喚に必要な呼符を一枚つつ貰って……

「……いざ召喚ルームへ!!」

ルデアの召喚ルームには『フェイト』というマシユの盾を代用し

たのとは違う、きちんとした召喚システムの基盤が鎮座していた。

「さてと、勢い半分でここまで来たけど料理人のサーヴァントとか実際にいるだろうけど、来てくれるかなあ」

「かなり確率は低いですけどゼロではありません。」

頑張りましょう!」

「ありがとう、マシユ。めぐみんとマリアさんも同行しますか?」

「私は一応マスターの護衛も兼ねて一緒にいるわ」

「……………(ハグハグハグ)」

めぐみんは食堂から私の炒飯を皿ごと持ってきて頬張っている。

召喚ルームにパラパラの米を撒かないように。

「まずは一投目をシュート!!」

ダヴィンチちゃんから貰った分の呼符を『フェイト』の召喚サークルに投げ込む。

すると聖晶石と同じように呼符が弾け、召喚サークルの上に三本の光輪が発生した。

以前の冬木の時に分かったことだけど、どうやら光輪が三つでサーヴァントが、光輪が一つでそれ以外が出てくるのが召喚の決まりのようだ。

はたして、光輪の内側から光の柱が立ち一人の小柄な少年が現れた。

身長はめぐみんと同じぐらいかそれより少し高いぐらいで、体格はグリーンの大きめのジャケツトを来ているから判別は難しい。

だけど、一番異質なのは彼の目だろう。

そこには一切の感情が見えず、ただの虚のように空っぽで見ていると少し怖くなってくる。

「……………アンタ誰?」

「私は衣荷藍華、ただの魔術使いだよ。貴方の名前は？」

「俺？……………三日月・オーガス」

「そっか、じゃあ『ミカ』、よろしくね」

私がそう言つて握手しようとして右手を差し出すと彼は一度持ち上げかけた右手を見てから、私の右手を握った。

私は正直驚いた。ミカの腕はとてもゴツゴツしていて力加減を調節してようだけど若干痛く感じる。

めぐみんもそうだけど、サーヴァントつて異質な子供達の含まれるんだなあ、と私は思った。

……………そして今一番の最優先事項をミカに聞いた。

「そういえば、ミカは料理できるの？」

「料理？アトラにいつも貰って貰ってたから、やったこと無い」

「オウ、その歳で彼女持ちなんだミカ……………」

ミカの返答に別方向のダメージを受けながらも気を取り直して……………

「続いて、二投目をシュート!!」

次はドクターから貰った呼符を召喚サークルに放り込む。

先程と同じように三本の光輪が発生した。

「良かったあ、手持ち最後の召喚つて、何気にトラウマなんだよねえ」
「確かにあの時のマスターの顔は決して人には見せられない物だったわね」

「まるで異端審問にかけられたある冒険者のような顔でしたよ」

「めぐみんとマリアさん、少し黙ろうか」

軽いフラッシュバックが起きそうな精神状態の中でサークルから

す姿は英霊にはまるで見えなかった。
もはやシエフの領域だ。

「~~~~~!!、~~~~~!!!」

「……マシユさん、そろそろ猿轡だけでも外しましょう」

「……それもそうですね。先輩、失礼します」

「~~~~プハア! マリア、アーチャーに私の分の親子丼頼んでおいて
!」

「え、そっち(ですか)!?」

どうやら藍華は全て水に流したらしい。

その後も、アーチャーから貰った親子丼を他の職員と談笑しながら
平らげていった。

昼食時が過ぎ、あらかた人がいなくなったところで藍華はサーヴァ
ント全員をひとつのテーブルに集めた。

「さてと、それじゃ改めて自己紹介でもしよつか。

まずは名前と出身から……私は衣衾 藍華、魔術使いです」

「マシユ・キリエライト、カルデアの職員兼フオウさんのお世話係で
す。

「こちらがフオウさんです」

「フオウ……キユウ?」

マシユがテーブルの脚に隠れていたフオウくんを持ち上げる。

めぐみんの視線がフオウくんに鋭く突き刺さる。

「次は私ね。マリア・カデンツァヴァナ・イブ、セイバーのサーヴァント
よ。

「出身は米国で一応歌手よ」

「あ、だから戦闘中に歌なんて歌うんだ」

「それは私の宝具の発動に歌が必要だからよ。」

昔は歌わなかったら戦うことすらできなかったのだけど……」

「マリアさんの宝具については後ほど聞くとして、次はめぐみん」

するとめぐみんがいきなり席から勢いよく立ち上がった。

「我が名はめぐみん！」

紅魔族随一の魔法の使い手にして、最強の攻撃魔法『爆裂魔法』を操るアークウイザード！」

「はい、めぐみんはこんな感じの子だから皆気にしないでねえ」

「マスター、流石に私の扱いが雑すぎませんか!？」

「はい次々『マスター!』」

「私か………私は名もない英雄でね、私のことはアーチャーとクラスで呼んでくれ」

「じゃあアーチャー、詰まんないからやり直し」

「………これはただの自己紹介じゃなかったのか？」

「細かいことは気にしない気にしない」

アーチャーは呆れたように首を竦めて苦笑いする。

しかし、少し考える素振りを見せてから再び口を開いた。

「………訂正しよう、私のことは『エミヤ』と呼んでもらっても構わない」

「そっか。じゃあエミヤ、これからよろしくね！」

「ああ、マスターの期待に応えられるよう全力を尽くそう」

少し芝居がかった言い回しでアーチャーが……エミヤがニヒルに笑う。

藍華は最後の人物にお題を投げかけた。

「そんじゃ、次はミカの番だよ」

「ん、三日月・オーガス………」

「……………それ以上の何かは無いの？」

「うん、別に特別な役割なんて無いし」

「そっか……………今はそれでいいか！それじゃ改めて！

皆、ようこそカルデアへ！」

第一特異点 一幕目

「……………という事で、一つ目の特異点へのレイシフトの準備が整ったとのことなので、早速出発しようと思います」

ファーストオーダー終了から約一週間経ち、いよいよグランドオーダー……………人理修復への第一歩が今まさに踏み出されようとしている。

カルデアスのある管制室には私を含めた出撃メンバーが揃っている。

制御室ではオペレーターや職員が忙しく動き回っているのが見とれる。

『……………え、藍華君、聞こえるかい？』

「聞こえてますよ、ドクター」

管制室のスピーカーからドクターの声が聞こえてくる。

『まずは、現地に到着したら霊脈のある所に冬木の時と同じようにサークルを設置してほしい。』

そうすればこちらからの援助もしやすくなるし、君の意味消失も高確率で防ぐことが出来る』

「前回と同じくですね、分かりました」

他の英霊の皆はサークル設置後に召喚されるらしく、まずはマシユとそれぞれのコフィンに入る。

『アンサモンプログラム スタート……』

グラウンド オーダー 実証を開始します』



「——レイシフト、成功したみたいだね」

「そうですね、先p……いえ、マスター」

「……………」

軽い浮遊感を覚え、目を開けてみると私は広大な草原に仰向けで寝ていた。

青い空には、形を変えながら流れていく雲と白銀に光り輝く円環が浮かんでいた。

隣を向くとマシユとミカが同じように寝ていた。

「マスター、そろそろいいかね？」

「ん……ごめんねエミヤ、少しぼーつとしてた」

「なに、気にする事はない」

「それよりも何にもないですねえ、民家どころか人っ子一人見えませんよ」

立ち上がったって振り返るとエミヤとめぐみんが周囲を見回しながら近づいてきた。

その奥で変身後のマリアさんが白い装束にいた草を払っている。

どうやら全員揃っているようで安心した。

「さてと、まずは前にもした拠点づくりをしなきゃだよな?」

『そうしてくれ、サークルが設置できれば此方からの支援がしやすくなるし観測も安定する。』

なるべく大きな霊脈の上に設置してほしいね』

「分かりました、みんな行こっか!」

事前に貰った資料によれば今は百年戦争の休戦時期のようだから、いきなり鉛玉や砲弾が飛んでくることもないそうだ。

……でもそれは正史の常識であって、この特異点では通用しないのかもしれない。

それも踏まえて移動する必要もある。

「とりあえず、まずは人探しからだね。そこからこの時代にある聖杯の所在を突き止めないとね!」

「でもマスター、こんなに広い草原を見渡しても人影が全くないわよ?」

「所々に丘陵もあつたりしますので相当移動しなければいけませんね」

「私疲れるの嫌なので、マスターさんおんぶして下さい」

約一名ほどサーヴァントとは思えない発言をしたのもいるけど、確かに人影が全くと言っていいほどない。

「エミヤ、遠くの方に人影とか見える?あの丘の方とか」

「残念だか、木陰で穏やかに寝ている野兎の親子しか私には見えないな」

「……………なんかいる」

ふと、これまで話しに入ってきて来ないで寝ていたミカが声を出した。

そしてそのまま起き上がった北東の丘の向こうを指差してからこつちに向き直った。

「あっちの方に並んで歩いてる奴等がいる」

「ミカ、そんな事分かるの?」

「……………何となく」

「何となくですか、マスターひとまず三日月さんの示した方角に行ってみましょう」

ミカを先頭にして北東の丘陵に向けて私達は歩き出した。

下は短い草が生い茂っていたけどそこまで苦にはならなかった。

これからの戦闘での役割を話し合ったり、それぞれの思い出話を順番に聞いたり、背中に乗ろうとしたためぐみんの眼帯をスパークキングさせたりしながらとりあえず丘陵を越えた。

すると目の前には一本の道に隊列を組んで歩いている甲冑姿の団体を見つけた。

「あ、アレかな?ミカが感じ取ったのは」

「本当にいたとはな……………あの距離で地形の影にいる兵士たちに気づくとは、凄まじい索敵能力だな」

「そう?普通でしょ?」

「取り敢えずあの人達に聞き込み調査でもしてみようか」

「マスター、フランス語話せるんですか?」

痛いところを突かれてしまった、流石は我が後輩。

フランス語なんて習ったこともないし、そもそも海外旅行(カルデアを除く)なんてものにも言ったことないし。

英語に関しては平均的な成績だし、そもそもここで英語って敵国語なんだよね?

下手したら即打首?

「分かったわ、マスターはちよつとここで待っててちようだい」

「マリアさんフランス語喋れるんですか？」

「私……こう見えても国家エージェントだから」

そう言つてマリアは変身を解いて兵士たちの方へ歩いていった。

遠目から見ているといきなり現れたマリアさんに兵士たちが各々の武器を突きつけた。

しかしマリアさんが話しかけ始め、次第に彼等も武器を下ろし互いに会話をし始めた。

暫くしてマリアさんが兵士たちに手を振りながら戻ってきた。

「おお、流石国家エージェント」

「自分で言つてはみたけどそこまで大それたものじゃないわよ。

それだけでも、彼等から聞いた話だと今このフランスは戦争の真つ只中らしいわ」

「……それは妙だな。この時代、ジャンヌ・ダルクが既にイギリスに引き渡されたならこの戦争は粗方終わっているのではないか？」

「そうなのだけど、なんだか話によるとそのジャンヌ・ダルクが邪竜を率いて蘇った、との事らしいわ」

『ジャンヌ・ダルクが蘇った』

普通なら有り得ないはずの出来事、死者が生き返ることなんてこんなに大昔ではまず考えられない。

そうすると、恐らくそのジャンヌ・ダルクの一件には聖杯が絡んでる可能性が高い。

「マリアさん、それで蘇ったジャンヌ・ダルクは今どこにいるつて？」

「どうやら、オルレアンの城に大量の竜種と共に君臨しているそうよ。」

中でもとてつもなく強大な竜種がいて手出しができないらしいわ」

「マスター、どうします？」

その城ごと我が爆裂魔法の餌食にスイマセンスパーキングダケハヤメテクダサイ」

よろしい、しかし一筋縄では行きそうにないなあ。

今のメンバーだと消耗戦になると不利になる一方だし、でもその強大な竜種つてのがどんなものかも分からないんじゃ――

「――来る」

『愛華君、今すぐ戦闘に備えてくれ！高速で接近してくる神秘の群れがそこに迫ってくるよ！』

ミカとドクターの警告を受けた数秒後に兵士たちが慌て始め、東の空を指差し始めた。

地平線の彼方から空を背に黒い影が何十も飛んでくる。

色は緑に赤に黒と色とりどり、しかしいずれもが鋭い双眸と牙、長い尾、そして大きな翼を広げて飛翔してくる。

『ワイバーンだ！』

「エミヤとマリアさんは兵士たちのフォローに行つて！」

マシユとミカは私と、めぐみんは待機で！」

「先程から私の扱いが酷すぎませんか！」

「つべこべ言わずに動いた動いた！」

群れは此方に六割、兵士たちの方に四割ぐらいに分かれて飛んでくる。

マリアさんとエミヤが駆け出すと同時に腰に差してある、前もつてエミヤに投影して貰った莫耶を構える。

右手には左手で持った莫耶の強度と切れ味を付与して、顔の横で構える。

「マシユ、守りは任せた！ミカはなるべく相手の翼を狙ってね！」

「分かりました！」

マシユ・キリエライト、戦闘を開始します！

「わかった」

ミカの撃つ拳銃の発砲音を背に低空飛行している一匹の噛みつきを身体強化した敏捷性で躲し、柔らかそうな喉元に莫耶を振り下ろす。

エミヤ製の武器はそのまま喉元を一文字に切り裂き、ワイバーンがバランスを崩して地面に叩きつけられるようにして沈む。

上空にいる何匹かのワイバーンにミカの射撃が命中し、暴れながら高度を下げてくる。

そこへマシユが盾の縁を脳天に叩きつけ、地面に沈める。

うん、我が後輩ながらアグレッシブ。

「よし、このまま押し切るよー！」